



空き家利活用コンテスト2023 優秀賞



非住宅部門

事例 08

## 古民家 太田邸

国登録有形文化財、日本遺産の古民家  
歴史的価値を守り、地域活性化の拠点に



山林・田畑を多数所有し、農林・製材・養蚕・金融業などを営み、さらには三代の当主が村長を務めるなど、明治～昭和初期にかけて土地の中心的存在であった太田家。その邸宅は豪農を象徴する近代和風建築で、明治中期建造の主屋と門長屋、昭和初期建築の離れ、9つの蔵などが連なる。受賞者の尽力により国登録有形文化財、そして日本遺産に認定された貴重な建築様式を次代へ継承し、当時の農村文化を多くの人に体験してほしいと、農泊できる施設を目指して改修した。

構造や建具を維持して創建時の趣を残しつつ、風呂・トイレ・厨房等は近代化。Wi-Fi完備、さらに全館スプリンクラー設置、バリアフリー対応もしっかり。食事にも力を入れており、自家栽培の野菜を中心にした手料理でおもてなしする。三間続きの襖を外せば大広間になり、食事会や家族イベント、展示会などで利用できる。また、米蔵と器蔵は5.1chの音響設備、100インチプロジェクターを備えた多目的ホールに、門長屋の一角にある旧郵便局はカフェに生まれ変わっている。

“泊まれる・過ごせる日本遺産”は珍しく、地域活性化の拠点として今後の広がりが期待されている。

土間上がったところにある帳場。宿泊のチェックインカウンターとして使用している。歴代当主の仕事場だった部屋で、かつては「店」と呼ばれていた。正面の引戸は、漆塗のケヤキの一枚戸。独特の色艶は高い技術の証。この邸宅の長い歴史も手伝って、気品と風格を感じさせる。



主屋の入り口付近。昔ながらの雰囲気でお客を出迎える。



三間が並ぶ昭和初期建築の離れ。素木の良材を多用した上質な建物だ。

主屋の茶の間は、宿泊客の朝食等に使用。時が止まったような古民家、朝の清々しい空気。その中で味わう自家栽培の米、旬野菜たっぷりの健康和朝食は格別な美味しさだろう。



主屋にある8畳の奥の間。違い棚はしゃれた3段の拭漆、天袋の引手は千鳥。菱型をモチーフにした付書院の障子も上品な美しさ。



(写真上) 門長屋の右端にある「cafeひとつ山」。大正末期、地域に初めてできた元郵便局。一枚板のカウンターが静かに当時を物語る。  
 (写真左下) 蔵を改装した多目的ホール。音響にこだわり自作の真空管アンプとスピーカー、レコードプレーヤーを設置。映画・音楽鑑賞にピッタリだ。  
 (写真右下) 原野のように荒れていた敷地内の庭は、DIYで植木を剪定。再び端正な日本庭園となり、来訪者の心を癒している。



[ DATA ]

- 【所在地】八頭郡八頭町富枝38 【構造】木造2階建て、平屋建て  
 【築年月】明治17年、明治30年、昭和8年  
 【改修後の用途】飲食・宿泊施設、喫茶、貸イベント会場、6次化等作業場、事務所  
 【間取り構成】個室9室、納戸、多目的ホール、厨房、浴室(2カ所)、トイレ(8カ所)、  
 cafe「ひとつ山」、門長屋、蔵 ほか  
 【改修期間】2017年9月～2018年3月  
 【設計者】設計工房 小林優貴秀一級建築士事務所 【施工者】株式会社 田中建設